大妻中学・高等学校についてのインタビュー
－学校改革の取り組みを中心に－

An Interview on Otsuma Junior and Senior High School：
An Example of School Reforms in Changing Society

増　田　　稔*
安　東　由　則**

MASUDA, Minoru & ANDO, Yoshinori

目次

はじめに：インタビューの目的
大妻中学・高等学校について
インタビュー
1. 私学を取り巻く状況
2. 大妻高校卒業生の進路変化とその要因
3. 内部進学方針変更後の対応
4. 大妻学院の４つの中高について
5. 大妻中高における教育の長所・特徴について
6. 大学進学対策
7. 生徒募集の戦略

* 大妻中学高等学校・教頭
**武庫川女子大学文学部教育学科・教授／教育研究所・研究員

はじめに：インタビューの目的

日本の私立大学には、中学及び高等学校を併設しているものが少なくない。かつてはこうした高校を卒業してのち、付設の大学に進学する割合が高かったが、近年においては、付設大学への進学にこだわらず、他大学の受験を許容する、あるいはむしろ積極的に難関校を目指す附属高等学校も増えるなど、事情が異なってきている。

1980 年代後半に中学・高校受験者のピークを迎えた後、少子化は不可逆に進行しており、中学・高校はその定員確保が大きな課題となっている。大学進学についても、かつては厳しい大学受験を経ずに、大学への進学が保障されることが付属のメリットとされたが、近年では大学数が大幅に増加し、大学進学率が 50％を超えるまでになり、入試のあり方や学部の種類も多様化すると、エスカレーター式に付設大学に行くことのメリットは薄まり、むしろ選択肢を狭める足かせと認識されることにもなっている。加えて、経済状況もなかなか改善しない中、高額な学費が必要となる私立の附属中学・高校に対する生徒や親の期待は、非常に多様化してきているのではないだろうか。

こうした社会環境が変化し、期待が多様化している中で、大学附設の中学・高校は何らかの対応を探っていかざるを得なくなっている。附属中高は、こうした状況をどう認識し、どう対応してきたのか、あるいはどのような対策を取ろうとしているのか。インタビューを通して、その具体的な取り組みを明らかにし、今後の私立大学附属中学・高校のあり方を考える際の参考材料としていきたい。

今回は、大妻女子大学の併設学校（大学附属ではない）である大妻中学・高等学校を取り上げる。インタビュー対象は、大妻中高に 30 年以上勤務され、クラス担任、教務や進路指導の立場から、この間の変化を経験してこられた増田稔教頭先生である。

大妻中学・高等学校について

大妻学院は、大妻コタカ（明治 17 ＝ 1884 年生）が、1908（明治 41）年に 24 歳で裁縫・手芸の私塾を開設したことに始まる。大正 8 年に私立大妻実科高等女学校併設し、1921（大正 10）年には私立大妻高等女学校とした。さらに昭和 17 年には大妻女子専門学校の設置が許可された。

第二次大戦後は、1947（昭和 22）年に新制大妻女子中学校、翌 48 年には大妻女子高等学校が設立され、さらに 1949 年に大妻女子大学（家政学部）が、翌 1950 年には短期大学部が設置された。1972（昭和 47）年には大学院も設置される。中学及び高等学校では、1988（昭和 63）年に大妻多摩高等学校を開設（中学は 1993 年）するとともに、他学校法人との合併を行った。

今日、大妻学院は大妻中学高等学校をはじめ 4 つの中学・高等学校と、大妻女子大学・短期大学・大学院を擁する総合学園となっている。2016（平成 28）年度時点で、4 つの中学・高等学校の生徒数 4,735 名、短期大学 837 名、大学（5 学部）6,653 名、大学院 56 名で、合計 12,281 名の生徒・学生を数える。

建学の精神は、「廉恥報恩を基調とする徳操を涵養し、時代の進運に適応すべき学芸を授け、有為な社会人たらしめること」であり、創立者の大妻コタカ氏の教えとして有名な校訓「恥を知れ」は、「自分を高め、自分の良心に恥ずる行いをするな」という自分への戒めであるとされる。（以上、文責：安東）

大妻中学・高等学校についてのインタビュー

日　　時：2016（平成 28）年 12 月 8 日
場　　所：大妻中学・高等学校
回 答 者：増田　稔 教頭（大妻中学・高等学校）
聞 き 手：安東由則（武庫川女子大学教育研究所）

1．私学を取り巻く状況

安東　今回お話を伺いに来ました背景には、私どもの大学附属中学・高等学校において、生徒募集が難しくなってきているという危機意識があります。附属中高があります兵庫県の阪神地区の中学・高校入試に関わる現状からお話します。学校は神戸と大阪の中間に位置し、地元西宮市や神戸市、さらには大阪方面からも生徒を集めています。東京ほどではありませんが、私立中高が多く、進学熱も高い地域です。

中学の募集定員が 400 名で、高校へはほとんどが進学します。高校の定員は中学からの進学を含めて 500 名です。女子校としては比較的大規模な定員です。中学入試においてはほぼ定員に近い入学者を確保してきていたのですが、2012（平成 24）年頃より、入学者が急速に落ち込むようになりました。これは高校の定員確保にも大きな影響を与えています。遅きに失した感はありますが、この原因究明とともに、どのようにして生徒を引き付けられる魅力的な学校づくりができるか、様々な観点から考え、できるところから実施していっているところです。

このようになった要因としていくつか挙げることができますが、その一つは大阪府による私立高校への授業料補助があるのではないかと考えています。先ほど申しましたように、私ども学校は大阪にも近いものですから、ある程度の人数は大阪方面からきていましたので。

もう一つの要因として、私どもの学校がある阪神地区は、高校入試で最近まで総合選抜をずっとやっていたのですが、2009（平成 21）年前後から総合選抜を廃止していきまして、平成 27 年度入試からは兵庫県の学区も拡大して、西宮市内だけではなく、近辺の宝塚や尼崎、伊丹も含めて自由に通えるようになりました。その結果、それまで平準化されていた公立高校のレベルが上がり、従来よりも難関校に合格者をたくさん出すようになってきたと言われています。

この他にも、少子化による 15 歳人口の減少など、様々な要因が絡んでいるのでしょうが、私立中高の受験を取り巻く状況がかなり劇的にかわっていったということで、こうした環境変化に対してどう対応すべきかをいろいろ検討し始めていますが、

なかなかうまくは進展しません。今まで、私どもの学院では、中学・高校・大学の「10年間一貫教育」を標榜し、それを売りにしていました。受験に左右されずに長期スパンでゆとりをもって部活動等の諸活動に取り組める10年間の連続した教育を重視してきた、今までの伝統があります。

本学付属の場合、高校卒業時も他の大学に進学することはほとんどせず、併設の武庫川女子大学に行かせていたんです。短大も含め、9割り近くが進学していたと思います。これは学院の方針であり、大学からは学生確保、高校からは進路先の確保という双方の要望が合致していたということでもありました。しかし近年は、徐々にではありますが、上の大学に行かせるという締め付けは緩くなってきているのですが、それでもまだ80%近くはあるかと思います。

大学の知名度や難易度は昔より上がってきており、女子大学としては文学や家政系だけでなく、薬学や教育、健康スポーツ、建築、看護があるなど学部もバリエーションに富んでいる方だと思うのですが、それでも、受験なく併設の大学に進学できるということだけでは、中高の生徒募集が厳しくなってきています。中学校の入学定員が400人と多いという要因もありましょうが、どうしていけばいいのか知恵を絞っているところです。

東京の場合、大学を併設している高校でも、大学とは独立してやっていらっしゃるところも多いようです。日本女子大学さんは、少し違うのかもしれませんが、他の女子大学附属高校は、大学と独立しているということが割と多いように聞きました。

増田　大学が近くにあったり、併設であったりしながらも、それにこだわらず独自にやっているところもあります。確かに、今だけ見るとそうなのですが、歴史を紐解いていくと、ここが転換点だったなというところが明らかにありますので、今日はその辺もお話しできるかと思います。

安東　関西の附属高校は、高校が独自の戦略をたてるといった動きが遅いようです。

増田　東京は過敏でしたね。そういう意味で、本当に早くからスタートを切りました。

インタビューのお話を伺いましたので、本学の高校卒業生の進路について調べてみました。実は私どもにも、総合的に数十年を見渡した資料がなくて、それぞれの部署ごと、あるいは学年ごとでバラバラに持っておりましたので、そうしたデータを拾い集めて、高校卒業生の進路に関する表を作ってみました（表1）。1998（平成10）年度と1999（平成11）年度の要覧が見つからずブランクになっていますが、それでも生徒の進路がどう変化していったのか、ある程度のところは分かると思います。

2．大妻高校卒業生の進路変化とその要因

安東　わざわざありがとうございます。なるほど、表を見ますと変化がはっきりと分かりますね。1992（平成 4）年度ころまでは、大妻の大学・短大への進学が多いですね。20 数年前の 1990 年前後はまだ、4 年制よりも短期大学への進学が圧倒的に多いです。

増田　かつては、かなり短期大学のほうが盛んでした。

安東　私が武庫女にきた 20 年近く前には、まだ短大への入学者の方が大きいぐらいでしたが、その後 10 年間で大きく変わってしまいました。

表 1．大妻高等学校卒業者の進路別人数と比率

年度	卒業年月	卒業生数	併設 4 年制大学進学者	併設 4 大進学率	併設短期大学進学者	併設短大進学率	他大学進学者	他大学進学率	その他(浪人・専門学校等)	比率
1989(H1)	1990.3	394	86	0.218	200	0.508	83	0.211	25	0.063
1990(H2)	1991.3	414	76	0.184	214	0.517	72	0.174	52	0.126
1991(H3)	1992.3	375	108	0.288	140	0.373	94	0.251	31	0.083
1992(H4)	1993.3	273	86	0.315	88	0.322	65	0.238	31	0.114
1993(H5)	1994.3	277	81	0.292	48	0.173	84	0.303	58	0.209
1994(H6)	1995.3	316	72	0.228	49	0.155	140	0.443	55	0.174
1995(H7)	1996.3	277	77	0.278	39	0.141	126	0.455	41	0.148
1996(H8)	1997.3	273	69	0.253	20	0.073	142	0.520	42	0.154
1997(H9)	1998.3	249	57	0.229	6	0.024	163	0.655	23	0.092
1998(H10)	1999.3									
1999(H11)	2000.3									
2000(H12)	2001.3	260	30	0.115	4	0.015	183	0.704	36	0.138
2001(H13)	2002.3	266	35	0.132	2	0.008	185	0.695	41	0.154
2002(H14)	2003.3	258	30	0.116	1	0.004	180	0.698	35	0.136
2003(H15)	2004.3	260	32	0.123	1	0.004	172	0.662	52	0.200
2004(H16)	2005.3	266	30	0.113	1	0.004	185	0.695	46	0.173

注：1998 年度及び 1999 年度については、インタビュー時点において、資料の確認をできなかった。

(1)　中高一貫となる以前：1990 年まで

安東　1989（平成 1）年からの表を作ってもらっていますが、この頃はちょうど、第 2 次ベビーブームの世代が卒業していく頃ですね。卒業者数も 400 名ほどあって、その 7 割が付設の大学・短大へ進学しており、特に短大へは半分以上が進んでいます。

増田　実は私が大妻高校に入ったのが 1985（昭和 60）年で、最初の卒業生を出したのがこの 1 年前、1988 年度になるのでしょうか。そのとき、1 クラスに 50 人の生徒がいたんですが、50 人の中で 10 人が外の大学に出て行きました。その学年のクラスの中では割合としては多い方です。他クラスの先生からは、私のクラスで他大学にたくさん出ていってくれるから、「大妻女子大の推薦の枠が空くので助かる」と言われた覚えがあります。

安東　その頃はまだ、付設の大学・短大に行きたいという生徒が多かったのですね。

増田　そうです。当時、1学年に8クラスあったんです。1クラス50名で8クラスですから、学年で400名程度です。そのうち、1クラスだけ受験クラスがあったんです。

安東　もう受験クラスがあったんですね。

増田　Bコースと呼んでいました。いわゆる理系が中心になるようなクラスになっていました。この理系クラスですが、高2から高3に上がるとき、外の大学に出ることを選択してクラス編成をするんです。外の大学に出ていった者のうち、だいたい50人ぐらいはBコースの人たちですが、その他に30数人は外に出ていきました。その他のクラスは7クラスですから、1クラス当たりだいたい5人が外に出るかどうかです。そのぐらいの人数ですから、進路指導も本当に楽でしたね。

安東　高校の進路では、大妻の大学・短大のどの学部・学科に何人割り振るかということくらいでしょうか。

増田　大学から、今年は何学部何学科に何人、何人という形で割り振られて、それを生徒の志望と照らし合わせて、成績順に並びかえて選抜をしていきます。

成績上位の子は希望どおり。16番目ぐらいになると、この学科はいっぱいだから、この子は第2志望だねといった調子で、第1志望優先主義ではなく、あくまでも機械的に成績順に割り振ったものでした。

当時は、本当に短大の方の就職がよくて、私のクラスでも短大に進んだ後、それこそ丸紅さんとか三井物産さんといった総合商社にすいすい入っていったくらいでしたね。むしろ短大の方が、人気がありました。

安東　まだ女子の大学進学率において、短大のほうが高かった時代ですね。

先生が中高に入られた頃、外の大学に行くというのは、許可がされていたのでしょうか。武庫川では、割と締めつけが厳しく、内部に進学させるという方針であったようです。当時は、よほどの理由がない限り、外には出さなかったと聞きました。

増田　外に行くことを表明したら、もう大妻には入れないといった決まりはありました。

安東　出ていくかどうかは、高校3年生のときに決めるのですか。

増田　そうです。Bコースは当然カリキュラムも違いますので、総合的な成績を出して、その成績順に並べる際に、やっぱり条件が違っていると不都合があるだろうということで、Bコース選んだ子は、定員が空いていれば、そちらに回ることができるというシステムでした。ですから、文系も理系も、自然と受験に回る子が多かったです。

安東　Bコースを含め、定員の2割程度（80名）が外の大学に出ていくといった状況は、いつ頃まで続きましたか。表を見ますと、1992（平成4）年度から卒業者数が100名ほど大幅に減少しています。その翌年以降、内部進学が少しずつ減少していっているようです。

増田　うちの中高が一貫に切りかわるのが、平成に入ってすぐ、1990（平成2）年から

です。私が大妻に入った年（1985年）には、今の4つの姉妹校のうち、大妻中野高等学校（当時、別法人）しかなかったんです。入ってすぐの頃から、新たな将来構想が考えられていました。うち（大妻中学・高校）に割り当てられている400名の定員ですが、先々を見ると、少子化が進む中でこの定員を集めていくのは難しいと見ていました。今後の少子化対策として中高一貫化を検討すると同時に、うちの学校のウイークポイントが何かも考えました。その結果、割合、東の方から生徒が来ているのですが、西からの生徒を見逃していたので、そちらに学校をつくれば募集も期待できると考えました。また、大学も同時に多摩キャンパスをオープンさせ、社会情報といった学部・学科を構想していました。

そうした将来構想の中で、うちは高校生の定員を減らす、また中高一貫として高校入試はしないということにし、多摩に新しい高校をつくることによって、減った分の定員を補い、大妻の中学高校全体ではちゃんと数をそろえた上で、2つの学校が共存していくような形にしていこうと考えました。千代田の中高（大妻中高）は、中高一貫ということを売りにして、打って出たのがそのあたりですかね。

安東　1988（昭和63）年に多摩に高校ができ、中学校は1994（平成6）年に開校しています。千代田の大妻中高の定員削減や一貫化と連動してということでしょうか。

増田　既に入学している生徒の定員を減らすわけでもありませんから、そのまま続いていった形です。高校の卒業者が大きく減っている1993年度が、初めて中高一貫生が卒業していった年ですね。

安東　このころ、中学校の募集人数はどれくらいあったのでしょうか。

増田　変わっておらず、中学は280名です。当時6クラスでしたから、1クラス45人。

安東　以前は、そこで高校入試で120名ほど入れて、400名ぐらいにするということだったんですね。高校受験もおやめになったわけですね。

増田　1989（平成元）年度の入試からは、高校生はとっていません。

安東　それについて不安はなかったのでしょうか。財政面や、教員処遇の面などですが。

増田　いや、特にはなかったですね。中学としては何かが変わるわけではありませんし、世の中の流れからいって、中高一貫のよさが結構アピールされている時代でもあったので、うちの学校に特長を付与して売り込んでいくにはよい戦略だろうと考えました。そして、多摩にも新しい学校ができるので、トータルとしての生徒確保でも、そちらが安全弁のような働きをするのではないかと考えていましたね。当時、多摩は高校しかなかったのですが、その後、多摩でも中学からの一貫校であることを主張するのが戦略的でよいということで、一貫校になりました。

ですから、大妻中高の入学者枠（280名）は変えずに、多摩高校をちょっとプラスにして、4クラスの学校をつくることでまとまりました。

表２．大妻学院傘下の４中学・高等学校の略年表

	大妻	大妻多摩	大妻中野	大妻嵐山
1919	大妻実科高等女学校設立			
1921	大妻高等女学校に改組			
1947	大妻中学校設立			
1948	大妻高等学校設立			
1971			大妻女子大学中野女子高等学校＊（文園高等学校から）	
1972				大妻女子大学嵐山女子高等学校＊（嵐山女子高等学校から）
1988		大妻多摩高等学校設立		
1990	大妻高校の募集を停止し、中高一貫校に			
1994		大妻多摩中学校設立		
1995			大妻中野に校名変更し、中学を開校	大妻嵐山に校名変更
2003				大妻嵐山中学校開校
2013	学校法人大妻学院と誠美学園が合併し、大妻学院が存続			

＊ 1971 年に学校法人誠美学園が大妻学院の傘下に入った。
但し、2013 年に法人合併するまでは別法人で、この 2 校は誠美学園が運営していた。

安東　高校からの募集のない、完全な中高一貫校ですね。

増田　多摩の中学校は高校設立 6 年後の 1994（平成 6）年に設立されますが、そこから中高一貫に変わっていきます。多摩の人数は、そこから変わっていないはずです。

⑵　卒業生進路の大きな変化：内部推薦の見直しと対応

安東　新たに多摩が作られ、大妻中高が定員を減らして一貫校になる頃から、卒業生の進路も大きく変わっていますね。これまで併設の短大に行っていた人たちが一挙に減って、他大学への進学が大幅に増えています。

増田　実は大きな変わり目は、1993（平成 5）年度卒業生からです。この人たちが高校 1 年生のとき（平成 3 年）、大きな変化がありました。

それまで、高校から大学に生徒の推薦をしていたんですが、推薦の基準がありまして、評定 3.0 以上でないと大学に入れないということでした。ただ、大学との間に約束事があって、例えばこの生徒は 3.0 には達していないけれど、学校皆勤であるという場合にちょっとプラスをするなどしていました。他にも、英文科に行くのであれば、英検（実用英語検定）の高い級を持っていれば採ってもいいとか、家政系に行く場合には家庭科と、例えば化学の評定が 3.5 以上であれば、全体が 3.0 に足りなくてもオーケーだよというように、いろんな抜け道がありました。結局、少し評定が低い子でも何とか短大あたりには入れてあげるというのが、進路指導においてなんとなく

あった時代なんです。

中学・高校と大学との間で懇談会がもたれ、様々な意見交換をしていました。懇談会の席上、例えば評定の高い志望者がある管理栄養士や保育士を養成する学部・学科の先生からは特にクレームなど出ないのですが、ちょっと評定の低い生徒たちを無理して入れてもらっている学科や短大の先生から、「どうも中高の卒業生さんは落ちつきがないですね」とか、「基本的な素養が備わっていないですね」とか、結構言われていました。高校としては、「改善に努めます」といった話はしていたんです。

それが、先ほどの 1993（平成 5）年度卒の生徒たちが 1 年生のときに、大学側がとうとう強気に出てきました。大学の推薦入試は当時、年を明けてから行われていたのですが、11 月に行いますという通知が来たのです。それが何を意味するかというと、入学を希望していても、それが叶わないことがあるかもしれないということです。従来の 1 月、2 月に行う推薦試験では、絶対に落ちることはないです。他大学はもう受験できませんから。ただ、面接をしたり、書類を見たりして、この子は少し不足があるなという子にはチェックがついて、卒業までにちゃんと補習を施してくださいということでした。

安東　そのころから進学前の補習をやられていたんですね。

増田　そうなんです。それをしたうえで大学に入学をさせていたのですが、それが 11 月の入試になるということですから、補習では済まず落とされるんだ、入学を希望していてもそれが叶わないことがある、との危機感が高校側に出てきました。

当時の担任と進路指導の教員たちが、それへの対策で、落とされないように、あるいは落とされてからでも、他大学を受験して受かるよう、授業の進み方や内容を見直し、万が一のときでも対応できるようにしていこう、のほほんとした学生生活ではなく、しっかり勉強もさせようという方向に切りかわったのが、1991（平成 3）年です。

推薦入試の日程が変わった 1993（平成 5）年卒業者のうち、結構な人数の生徒が、「どうせ落とされるかもしれないなら大妻にこだわる必要はない」と考え、他大学受験をしました。

安東　なるほど、学院内部での大学と高校の間の関係に変化があったのですね。

増田　男女雇用機会均等法が始まったのは 1986（昭和 61）年でしたでしょうか。当時、ドラマなどでも家庭に入る女性よりも、結構、外でバリバリ働きながら格好よく生きるという流れが作られ、それも後押しをしていたんじゃないかと思うのですが、女子大ではなくて、男子と一緒に、それこそ法学部や経済学部とか、あるいは理工学部とかに目を向けるようにもなっていきました。

安東　バブル経済の頃でもあり、共学大学志向や 4 年制大学志向、社会科学系学部への

女性の進出が、その頃から強まっていきましたね。

増田　その辺を志望する生徒たちが多くなっていき、「それじゃあ大妻にこだわる必要がないよね」というようになっていったのが、この 1993（平成 5）年度だったんです。大学受験で結構、よい成績が残っていて、この年度の卒業生の中に、一浪ではありましたけれども、東京大学に入った生徒が出たんです。さらにその次の年にも 2 人出ました。それで教師も生徒も、「何だ、結構やれるじゃないか」と気がついたということがあると思うんです。ですから、大学から高校に与えられた定員があり、大妻の 4 年制大学については、それでも生徒の進路希望にぴったり合うところがあったんですが、短大に至っては「受けたってどうなるか分からないし、外から受験しても入れる」と思われるようになり、結局、短大へはあまり進まなくなってしまいましたね。

安東　その流れは一気に進んでいったようですね。

増田　そうです。本当にあっという間に、短大への行き手が少なくなりました。

3．内部進学方針変更後の対応

(1)　親や教員の反応

安東　その際、気になることの一つは親の反応です。「せっかく、エスカレーター式で上の大学に行けると思って中学校から入れたのに」などの反応はなかったでしょうか。

増田　親に対する進路説明会が、高校 1 年生から 2 年生に上がるときと、2 年生から 3 年生に上がるときと、それぞれあります。その中で、進路の教員、あるいは学年の教員から、今こういう推薦入試の状況になっていて、今さら大妻女子大学への入試をもとに戻せとか、枠を見直せということは不可能なので、この現実に対応するために、私たちはこういう考えてお嬢さんたちを指導していきますと説明をしていました。

そうしたこともあってか、親御さんからも反対があまりなかったんです。私はその学年にいたわけではないのですが、学校として特段の配慮が必要だとか、きちんと一人一人に対する説明が必要だとかというところまでは、立ち入る必要がなかったように記憶しています。その親御さんの世代では、学歴志向が変わったというか、女子大にこだわる時代ではないんだろうなといった意識もあったかと思います。

安東　女子大の場合、どうしても人文系や家政系が多く、学部の幅が限られますからね。

あと一つ難しいのは、教員の意識だと思うのです。私たちの附属高校もそうですが、上の大学に行かせておけばいいというやり方で来たのが、学力を付けて外に出そうとなった時、それまでの教員で大学受験指導ができるかという問題です。生徒たちをもっと上のレベルの学校に入れるように、教員側の意識の切り替えることが難しいのではないでしょうか。私学の場合、教員の入れ替わりがほとんどないですからね。

増田　その点でも、私どもは幸運であったと言えばよいのかもしれません。私が勤め始めてからの3年間で、戦後間もない頃からこの学校を育ててきた、いわゆる古参の先生たち15人ぐらいが定年で退職されました。私が採用されるときの校長先生に先見の明があったのでしょう、「これからは、女の子は家庭に入ってという時代ではなくなるから、学歴の高い先生、受験経験の豊富な、難関大学を卒業した若い先生を採っていきたい」ということでした。私の同僚の中にも、東大卒の人が来るわ、早稲田卒や慶應卒は来るわ、国立の旧東京教育大（現、筑波大）出身の教員も入ってきました。先輩方、私の下の代にも、ものすごく学歴の高い方がそろっていらっしゃったのを覚えています。

安東　1980年代終わりぐらいでしょうか。

増田　そうです。若い教員の中にもどんどんそういう人たちが増えていきました。そういった人たちは受験勉強に慣れ、受験指導は得意ですから、自分でやれることがあるんだったら、幾らでもやるよといった感じで、すごく授業も充実していて、かなり高度なこともやっていたことを覚えています。

⑵　カリキュラムの変化

安東　ということは、その頃からカリキュラムも変わっていくわけでしょうか。

増田　そうですね。カリキュラムも何年かに1回ずつ変えていく形になっていますので、受験対応のカリキュラムにしっかりと変わっていったのが、多分この1995（平成7）年度あたりですね。2年ぐらいかけて、みんなでああでもないこうでもない、あの学校のカリキュラムはこうだというように研究しながら作っていきました。

　かといって、受験一辺倒でなく、うちのよさである、家庭科であるとか保健体育、あるいは音楽系、美術系などの科目、そうした受験科目ではないものも疎かにせず、なおかつ生徒の希望に応えるには、結局、選択科目を充実させるやり方がいいだろうということで、カリキュラムを作っていきました。それは、今も続いているんです。

　また、これまでの1クラスだけが課題組（B組）、他のほとんどのクラスは推薦組という分け方を変えてほぼ横並びにしました。取り組んだのは類型選択の仕方です。

安東　1組だけ受験クラスがありましたが、それがなくなったのはいつごろですか。やはりこの1990年くらいでしょうか。

増田　1989（平成元）年度に入学した生徒が卒業する1994（平成6）年度には、まだBコースあったと思います。今、在職している教員が、自分はBコースだったと言っていますので。特に特進コースといったものは作らず、クラスの中には文系も理系も、国立を志望する生徒も、大妻を志望する生徒も混在する形でした。

　この1994（平成6）、1995（平成7）年頃には、まだ大妻の4年制大学に進学する

比率は結構高かったですね。この後の2000年頃から、AO入試が導入されて4年制大学にも大きな波がきて、進学のあり方が変わってきたところがあります。新しい校舎が建った後ですから2002（平成14）、2003（平成15）年あたりからでしょうか、進路指導の体制がすごく変わっていきます。先ほど言ったように、難関大学出身の若い先生たちが採用され、その後、順調に育っていき、自分たちの力で新しい進路指導をしていこうということで、大きく様変わりしました。さらに、学校の中に、PCがきちんと入りましたので、受験情報ですとか、生徒の成績情報がすごく体系的に整理をされて、誰もが使える形になっていったことも大きいかと思います。

例えば平均評定が4.0の生徒が早稲田大学を受けた場合に、どのぐらい受かっているかも一目瞭然にあらわれます。

安東　6年間の一貫のカリキュラムも、その辺で整備されていったのでしょうか。

増田　そのあたりでカリキュラムの整理もできました。中学のときやったものを高校でもまたやるという無駄をなくして、教科のシラバスも整えて、何年生でどの授業をしていけばいいのか、それを積み立てて、次の学年でどのように伸ばせばいいのかということを詳細に検討し、教科の中で真っすぐ柱ができていったのも、この時代ですね。

(3)　高校の大学からの独立性

安東　高校と大学の関係変化に対する親への説明、教員の意識改革についても伺いましたが、もう一つ、大学側の懸念もあったのではないでしょうか。つまり、今まで大学へ確実に入学していた学生が来なくなってしまう。私も誰かから聞いた話ですが、例えば100人の入学者を確実に確保していたものが、それができなくなると、その5倍ぐらいの受験者を集めなければならないということです。大学の学生集めが大変だということで、大学側から高校にプレッシャーがかかることもあるかと思うのですが。

増田　幸いうち（大妻中高）が減らした定員枠は、新たに加わった大妻中野さんですとか大妻嵐山さんですとか、そちらへ移行したので、大学自体からは、そんなに大きな圧力はなかったです。ただ、大学との懇話会の中では、「大妻中高は愛校心がないね」とか、「大体、真ん中より下の子しかよこしてくれない」みたいなことは言われましたね。しかし、きっかけつくったのそっち（大学側）なんですけれども。

ただその当時、理事長になられた中川秀恭先生がちゃんと文書を出して、大妻中高の教育に御墨付きをくださったんです。「これからは国際化と情報化の時代だ。国際化と情報化の旗のもとに子供たちをよりよい自己実現に向かわせるためには、大妻女子大だけに進路を限る必要はない」と。今まで通りちゃんと外に打って出ていいですよと。そしてそのことについて大妻学院は、何も口出しはしないということを文書で出してくれたんですね。

安東　そうですか。それは高校側としては心強いですね。

増田　多分当時の中高の校長が交渉に行って形にしてくれたのではないかと思っているんですけれど、それでこちらもちょっと勢いを得たといったこともありますかね。

安東　それはいつ頃になりますか。

増田　2000（平成12）年に入ってからになると思います。

安東　そうしますと、それまでも高校と大学はかなりの程度、独立していたのでしょうか。中学・高校と大学が併設されている場合、大学附属中高という形をとることも多いですが、そのような形態をとっていません。

増田　独立制ですね。例えば、大妻中高には中高の予算があり、大妻多摩には多摩中高で予算がある。学園系列としては一緒ですが、他に引きずられることはなかったように思います。大学にも、そしてまだ短大にも元気がありました。あるいは学生も潤沢な時代で、大妻女子大は地方から推薦で入ってくる人も多かったです。それもあって、その短大で潤ったところをみんなで分けようみたいなところがありましたかね。この他、同窓会組織がしっかりしていて、聞いたところでは、大学のほうには同窓会推薦という枠もあるようですね。

大学附属の形態をとっていない点については、関係者に聞いてみたことがあるのですが、これといったはっきりした理由は見当たりませんでした。納得できそうな理由としては、次の二点がありました。一つは、もともと高等学校と中学校が基礎となり、その後に大学が設立されたので、中高を大学の附属とする考え方をとらなかったという理由、もう一つは、大妻コタカ先生が学校の自主性・独立性を重んじる考え方をお持ちであったため、附属という呼び方を敢えてせず、中高生の将来の選択肢を狭めることを避けたのではないかという理由です。私見ではありますが、特に後者の理由は、大妻中学・高等学校が他大学進学者を多く出すようになった時代に、学院がその後押しをしてくれたことにも通じるように思います。

独立制とは言え、経営の側面から言うと、大学も一時期、短大の不調で苦しい時代があったのですが、今の花村邦昭理事長が入られてからすごく改革が進み、きれいな校舎が建つようにもなっていきました。この方は、以前、日本総研の会長をなさった方です。

安東　理事長さんは、創立者一族ではなく、外から入ってこられる方が多いのですか。

増田　そうですね。大妻という名前の方は、私が入った80年代の後半から1人ぐらい理事に名前を連ねていますが、その方も離れられていって、同族系の方ももう既にお亡くなりになってしまっています。何か大妻系の方が学校の経営に、学院の経営に口を出すということは、ほぼ、なくなっていますね。

4．大妻学院の4つの中高について

(1) 4つの姉妹校の設立

安東　少し話は変わりますが、大妻学院には4つもの中高があります。女子大としては非常に珍しいのですが、学校間での具体的な棲み分けといったものはありますか。

増田　実は棲み分けといったものは、あまりないんです。いろんな者に聞いたのですが、「いや特にね」ということでした。実は大妻多摩中高（1988年に高校設立）の場合、設立時に本校から2、3年に分けて15人から20人くらいの先生が移って行き、立ち上げた学校なんです。ですから、単純に姉妹校と位置づけられます。最近は、最初に移った先生たちも、皆さん定年迎えられて、今はほぼ多摩で採用された方々が学校を切り盛りしているようです。しばらく前までは、やはり校長先生とか、教頭先生とかはこちらから移った者が勤める状態でした。初代の校長先生もこちらで教頭を務めた方でしたから。多摩中高とは、今だと組合なども一緒です。ここと は何かと足並みを揃えていて、何となく進学校化しているというイメージがあります。

安東　大妻中野や大妻嵐山とは、少し系統が違いますね。（表2参照）

増田　もともと誠美学園が経営している学校だったので、しばらく前までは学校法人自体も、大妻学院と誠美学園で異なっていました。3、4年ぐらい前に合併しました。

安東　それまで大妻の傘下にあったものが、2013（平成25）年に合併したということのようですね。

増田　ただ、合併と言ってもそれぞれの教員の勤務条件などは全く違うのです。千代田（大妻中高）と多摩は一緒なんですが、中野、嵐山はそれぞれ独自です。人事交流もほとんどなしですね。本人の希望によれば移ることもできるようですが。

国際フォーラムとかで私学協会が主催する入試説明会だと大きなブースかあるのですが、50音ですから、同じ列に、大妻、大妻多摩、大妻中野、大妻嵐山と4校並ぶんですね。そうすると、いらっしゃった方々が、「どこが違うんですか」とよく聞かれます。そんなときには、うちではマニュアルがあって、「根っこのところはそれほど大きく変わるところはありませんが、強いて言えば、うち大妻中高はとにかくそのバランスのとれた全人教育を心がけています」と答えます。

例えば中野さんは今すごく英語に力を入れておられ、生徒一人一人にタブレットを用意したり、スカイプを使ってネイティブと直接会話できるようなシステムがあったりします。この他、アドバンス入試であるとか、さまざまな入試改革をしていますが、そのどこか一つだけを取り上げてそこだけをぐっと伸ばしていくということはやりません。子供のニーズや時代の変化に合わせて、多少その色合いをつけながら取り組んでおりますが、それでも基本にあるのは、バランスのよい生徒を育てていくんだ

ということでしょうか。これについてはあまり干渉しているところはないですね。

安東　大妻中野と大妻嵐山は同一法人でしたから、ここの関係は近いのでしょうか。

増田　いや、中野と嵐山も近いとは言えないと思います。同じ誠美学園の旗の下にありましたが、嵐山が目指していることと、中野が目指していることは、地域もかなり離れていますので異なると思います。

⑵　内部進学か他大学進学か：併設高校の戦略

安東　ここに大学附属高校を特集した記事[1]があります 。これを見ますと、大妻多摩を除く 3 校の内部合格率（卒業者中、系列大学に合格した者の割合）が掲載されていて、大妻中高 0.8％、大妻中野 11.3％、大妻嵐山 24.4％と、かなり色合いが違いますね。私が調べたところ、大妻多摩は、10％前後でしょうか。他大学進学では、大妻中高は早稲田に 37 名、慶應に 16 名、大塚中野はそれぞれ 8 名、2 名と差があり、難関大学への進学程度に応じて、中学の偏差値ランクも異なるようです。

増田　学校として「うちは進学校にしますよ」という旗上げをしたつもりはないのですが、やはり受験生も親御さんも、（高校の）出口のところをとてもしっかりと見ていらっしゃいます。こちらとしては、生徒のニーズに合わせてその教育の変化をつけ、指導していった結果、結構よい出口をつくれるようになって、そこに注目して受験を志す方々が多い状態であるということですね。中野さんや嵐山さんはまだ入学者の平均偏差値で言うと、それほど高くはなく、それぞれに特徴を出しながら、最終的には併設の女子大に進むのでも十分だよというような方々が多いように感じます。

安東　私立中高では、生徒集めのための共学化という流れがあって、関西でも共学化しているところが少なからずありますが、東京のほうではいかがでしょうか。

増田　男子校だったところが女子を入れるというケースは割合耳にするんですが、女子校だったところが男子を入れて共学化するということは、あまり多くはないようです。ただ、女子校であった嘉悦さんは、新しく、かえつ有明中学・高校[2]をつくられてかなり先進的な教育をしていらっしゃるように聞いています。

　その点、うちで共学にしていこうかという話は、これまで出てきたことはないですね。あくまで女子教育にこだわって、生徒たちを伸ばしていくというのがうちの風土には合っているんだろうと思いますし、幸いなことにそこまで学校の変革が求められるような危機には陥っていないということがあったかと思います。

安東　首都圏は女子校だけでなく、男子校もまだ多いですね。東京の場合、高校の 6 割程度が私学です。関西とはかなり違うところですが、近年の受験生の志向としてはい

---

[1]「入ればラクできるはもう古い：多様な進学に対応する付属校」『サンデー毎日』2016 年 9 月 25 日号
[2] 嘉悦女子中学校・嘉悦女子高等学校が、2006 年に共学化して改称

かがでしょう、別学志向や附属校志向が強まったなどといった傾向はありますか。

増田　もうこの時代では、「大妻女子大に行ければいいから」と言って志望してくる人たちはほとんどいないですね。卒業生がお母さんになって、その娘さんが中学に入学してくるとき、初めの頃、お母さんは大妻が大好きですから、そのまま女子大に進めればそれでいいという方もおられますが、入学して何年かたつと、「やっぱり外の難関大学に進学させたいと思います」というように変わっていくんです。万が一の保険のために女子大がついているぞというのは、変わってきているようですね。

安東　基本的に、どこか外の大学を受けて失敗した場合、大妻女子大への進学保証はしてもらえないわけですね。

増田　そうなんです。大妻女子大に進むか外に進むかをどこかの時点できちっと切ってしまうと、そこからはもう戻れない。例えば、内部進学の場合、11 月頃に決まるのですが、大妻女子大学に進学が決まったなら、そういった生徒たちにはその後、調査書の発行はしませんということは謳っています。そこは明確なんです。大学さんには申しわけないけれど。中高生、あるいは保護者の中からは、「女子大への進学の権利を持ったまま、他大学を受けさせてくれるならいいんだけど」という声も聞こえてきます。多分、共立女子さんがそういうやり方をなさっているようにも聞きました。

安東　共立女子大さんもですか。昭和女子大さんもそのようになったと聞いています。

増田　うちはあまりやる気はないようです。受験における作戦の一つとして、大妻女子大も含めていろいろ受験し、結局、大妻女子大におさまることになった生徒もいなくはないですね。大妻には中高 6 年間過ごしてきて愛着があり、馴染みの場所ですから、入試の結果、結局 10 人ちょっとくらいは、大妻女子大に行くことにしましたという生徒たちが毎年出ています。大学自体のステイタスも上がっておりますので、今の戦略でも、そう悪くはないとは思います。

安東　これからの私立中高の生き残り戦略としては、併設している大学に行けるだけが売りというのはやはり弱いですね。早慶クラスの難関大学の附属ならばいざ知らず。

増田　それはもう 10 年以上前からそうなっていると思います。

安東　東京近辺の他の女子大系列の高校さんも、そういう方策でいってらっしゃるところが多いのでしょうか。日本女子大は 8 割程度と非常に高く、共立女子大さんは 5 割ぐらい、上の併設大学に進んでいるという学校もありはしますが。

増田　私も自分たちの周りで、うちのライバル校になるようなところの情報ぐらいしか持っていないのですが、だいたい似たような色合いにはなっているかと思います。

安東　学習院女子は、共学の学習院大学があり、関西の同志社女子は同志社大学があって、大部分はそちらに進みますから、内部進学率が高いです。女子大だけでやっているところは、上の系列校に上げるだけでは、なかなかしんどいところはありますね。

5．大妻中高における教育の長所・特徴について

⑴　女子校としてのよさと教育方針

安東　中高の教育の中で、女子校としてのよさとしては、なにを強調されていますか。

増田　やはり居心地のよさでしょうか。通学が便利だということも1つとして挙げられますし、規模としては大きいのですが、大きいながらにいろんな人たちが、それぞれのよさを生かしながら過ごしているところでしょうか。

道徳的なところはまた違うと思いますが、人間の生き方として、こうでなければいけないというのではなく、こういう生き方ももちろんあるし、これもある、それぞれが認め合っていければよいと考えて、指導しています。勉強で頑張る子、部活で頑張る子、学校行事で頑張る子、生徒会などで頑張る子、あるいは図書室が好きでずっと本を読んでいる子もいて、それぞれに価値を認め合って過ごすのがよいんだよという雰囲気があります。そういう意味で、学校として割と居心地がよいように思います。

安東　ぎゅうぎゅうに、受験、受験というのではないですね。

増田　そんなことはないです。受験、受験となっていくと、先ほど言ったような体育とか家庭科といった科目にどうしてもしわ寄せがきますが、先生自体も体育の先生を大切にしていますし、家庭科や芸術の先生もとても熱心に取り組んでくれています。選択科目も多く、教員自体も受験に役に立たない科目は無駄だなどといった雰囲気はどこにもないですね。その点では、私ども大人も生徒も住みやすい、そんな学校です。

安東　学園の雰囲気というか、培われてきた伝統というものでしょうか。

増田　雰囲気、そうですね。先生と生徒じゃなくて、先輩から直接に流れているもの、上級生を通して、卒業生を通して伝わる学校のよさみたいなものがあると思うのです。学校生活の中で、とても上級生のお世話になるケースが多くあります。例えば進学熱がどんどん上がっている、実績もだんだん出ている取り組みの一つに、先輩が直接に自分の受験体験を語るというイベントがあります。これは合格報告会です。それから先輩を囲む会、これは大体、教育実習期間の6月に行っています。

それ以外ですと、あとに続く後輩に、いわゆる受験体験記のようなものを作っています。これは冊子になっていまして、それを生徒に配布して、選択科目ではどの科目をとったとか、どこどこ大学に受かるために、この問題集を使って勉強したといったノウハウなどを、なるべくバラエティに富んだ選択肢で毎年20人ぐらいの生徒に書いてもらい、まとめています。

安東　それはいつごろから始められましたか。

増田　現在出ているものが36号なので、36年前からですね。ただし昔は、それを特別な人たちに書いてもらっていました。外に出る人が少なく、学校としての進路指導が体系的でなかった時代でも、受験をする生徒にとって少しは勉強の指針ができるようにとの思いで、ごく限られた対象に向けて作られたものです。

⑵　クラス担任の持ち上がりとクラスの入れ替わり

安東　先生方は中学と高校で入れかわりといったことはないのですか。

増田　中学を中心に、例えば中1のときに担任が1組から7組からまで決まると、大体その先生たちが2年生、3年生と上がっていきますね。よほど病気とか自分の事情で退職なさる場合以外は必ず上がっていって、中3から高1になるときに、多い学年だと半分ぐらいが残り、少ない学年だと2人くらいになりますが、高校の先生と入れかわって、また高1、高2、高3と持ち上がっていきます。

安東　では、6年間ずっと担任の方もいらっしゃるのですね。

増田　もちろんいます。下からずっと子供を見ていくことの大切さがあって、新しく高校から入った先生たちも、「この子だけれど、中学のときどういう子だったの」というとき、書類で残ってはいますが、教員から生の声を聞くというのとでは全く違います。「このクラスではこういうことがあった」とか、「こういう生徒だから気をつけて扱ってあげて」とか。教師間の風通しがよくなるという効果があるんでしょうね。

安東　クラスメイトの入れかわりはあるのですか。

増田　昔とは違うのですが、今は中1から中2に上がるときに1回変わります。中2・中3は一緒。中3から高1に上がる時点で変わり、そこから先は選択科目の関係で高1から高2、高2から高3では全部クラス換えがあります。

安東　高1までは、理系進学の人も文系の人も混ざっているということですか。

増田　高2・高3でも、クラスの中に文理が混在しているのは変わらないですね。若干のパーセンテージの違いはあります。

安東　あとは、教科の選択でということですか。

増田　そうです。

　実は、世の中がこう変わっているから、こういうふうに生徒たちを変えていこうといったように、学校として主体的に行ってきたという形でなく、むしろ、推薦入学をめぐる大学とのやりとりであるとか、多摩に新しい学校ができて、それが中高一貫になってなど、周りからちょっとずつ埋まってくるといったことで、現在のうちの本体ができ上がったような、そういう偶然性もあるかと思います。

⑶　生徒と向き合い、自主的なクラブ活動を

安東　学校経営、特に女子校経営の中で一番核に考えてらっしゃるのはどのような点でしょう。

増田　以前と何も変わっていないです。本当に生徒と向き合う時間を、きちっと確保していくことだと思います。部活動もとても盛んな学校でして、それこそ全国大会レベルの部活が3つあります。ひとつはバトン部で、あさっては全国大会に出場します。ちょっと珍しい部活としてマンドリン部があり、大阪の全国ギター・マンドリンフェスティバルに出場して、2年連続で文部科学大臣賞をもらっています。あとは書道部です。全国高校総合文化祭がありまして、そこには毎年のように出ています。

安東　大体、どれくらいの割合の生徒が部活に入っていらっしゃいますか。

増田　中1の段階では、部活が好きで入ってくる者もいるので、40人クラスだとすると36人、90％は入っていますね。うちの場合、学校生活が円滑にスタートしてから部活に入るということで、5月の終わり、中間テストが終わるまで入部を待たせています。本当に待ち切れない子がいっぱいいます。中間テストの最後の日には部活に行っていいわけですから、クラスそっちのけで、どこかの部に行きます、あそこの部に行きますと言って、非常にたくさん入部届が集まったこともあります。球技系ではバレー、バスケ、ソフトテニスが3大部活と呼ばれています。

　文化部も運動部も、生徒たちは結構やっています。高校に上がると、塾に行ったり受験勉強があったりということで、部活に入る率は下がります。それでも総合的に見て、7割近い生徒は部活に入って活動しています。特に音楽関係は中1からとにかく積み立てますから辞めないで、高校の卒業近くまでやっていく生徒が多くいますね。

6．大学進学対策

安東　大学進学について伺います。クラブも盛んに行われていますが、進学実績もよく、早慶などの私学だけではなく、近年は国立大学への進学もずいぶん増えていますね。

増田　国立はおかげさまで、このところ随分入るようになりました。去年は少なかったんですが、大体、多い年だと40人くらいまではいける感じです。今年は割合、期待できるんじゃないかという話をしてはいるんですが。

安東　関西の場合、進学実績というと、どうしても国立が中心になってしまいますが、関東の場合は、私立大学も強いですね。

増田　関東って国立というとまず東大。じゃあその下は何なのというと、一橋。でもあそこは経済系、法学系ですしね。それ以外だと千葉大、埼玉大。そのあたりになると、じゃあ早稲田や慶応、あるいは上智などの方がいいんじゃないのとなりますね。

学年で成績が真ん中の生徒たちが受験をした場合に、MARCH（明治、青山学院、立教、中央、法政）に7割、8割通るぐらいの学力レベルを目指しています。

表3．大妻高等学校の主要大学の合格者数（過去3年）

学校名	2015年度	2014年度	2013年度
京都	1	−	1
一橋	3	1	−
東京工業	1	2	−
筑波	1	6	9
埼玉	−	1	2
千葉	3	5	2
お茶の水	2	−	5
東京医科歯科	1	1	3
東京外国語	4	6	8
東京農工	1	2	2
首都大学東京	3	4	3
防衛医科	1	−	1

学校名	2015年度	2014年度	2013年度
慶應義塾	19	22	23
早稲田	37	60	66
上智	24	46	42
法政	62	71	49
明治	51	68	72
立教	74	68	88
青山学院	33	40	40
学習院	20	24	18
中央	17	19	18
国際基督教	1	3	2
日本女子	35	58	64
津田塾	7	7	17
大妻女子	41	25	48

安東　入学してくる時点で、かなりレベルが高くなっているんですね。

増田　入ってくる偏差値は年々伸びはしないですね。昔みたいに誰でも受けるといったものではなくて、絞って受けてきます。複数の受験日がありますが、その中で偏差値が高いところは3日目の試験日で、定員が40人ですから、ちょっと難易度は高めにはなっていますが、それでも60はいかないです。1番手あたりの学校とは少し差がついた状態です。そのあたりの偏差値帯で入学し、入学から6年たって、早稲田に30、40人、慶応に15から20人、国立も全体で30後半から40人ぐらい入学しているといえば、生徒や保護者にとってまずまずお買い得感があると思います。

実は、うちの学校は学費が高い高校のベスト5ぐらいに入っているんです。厳しいお母さんからは、「こんなに払ってるのに、どうして成績が伸びないんですか」と叱られることも時々はあるんです。しかし、保護者も含めて学校を包んでいる環境は良好です。大きな問題も幸い起きてはいませんし、いじめ問題などがあっても、今は早いうちに対応ができています。ただ、風評がひとつ立つと、それまでの実績がフッと飛んでしまうぐらいの危うさは、もちろん自覚はしているんです。

安東　早稲田や慶応も含めて、推薦枠も多いのですか。

増田　そうですね。ただ、2004（平成16）年、2005（平成17）年あたりまでは、推薦への応募を生徒に任せていて、これだけの推薦枠があるから、欲しい生徒は受けてきなさいという形で行っていました。ところが、生徒も安全志向があって、学年3番の成績なのに、指定校で成蹊大学へ入る生徒も見られるようになってきたので、指定校を学校側で絞ろうとの動きが出てきました。高1のときから指定校の決まりをつ

くり、必ず第一志望で、きちんとその学校が指定する科目をとっていることが必要だと説明しています。

『進学ハンドブック』を毎年つくっており、指定校推薦の決まりといったものを用意するようにしています。これは教員用の進学資料集ですが、もちろん生徒用もあります。これができ上がったのは、若い先生たちが中堅になって、いろいろと指導を始めたころです。指定校推薦で、もしランキング同点だったらどうするかとかといった、細かい基準を作っていきました。推薦の場合、このような形式で生徒にも誓約書を書かせるとか、約束事が多いものですから。資料集の後半の方では、このあたりのことをどう勉強すればいいのかとか、どういう資料が必要なのかについては、過去の資料も含めて提供するようにしています。

安東　理系と文系とに分ければ、理系は4割ぐらいでしょうか。もっと増えましたか？

増田　今、理系は4割にちょっと届かないぐらいです。どういう分け方かということですが、文学部や外国語部などいわゆる文学系が3分の1、法や経済などの社会科学系が3分の1、理系に3分の1と、大体そんな別れ方ですね。

安東　看護や家政は理系に入るのですか。

増田　家政、看護は理系に入れています。看護志望は多いです。延べだと50人ぐらいが、受かっているはずです。部活をずっと続けながら、高い志望校に合格できるという生徒たちが毎年少なからずいるので、それも後輩の励みになっています。

安東　保護者も大学受験にかなり重きを置いていらっしゃるのですね。

増田　多分、入学のときからそういうことを望まれており、結局第一志望には受からなかったけれども、大妻に入れるんだったら、そこで頑張れば、それほど第一志望（の高校の生徒）に負けないところまで伸びていける可能性があるはずだということで、学校を信頼されている方は多いように思います。

7．生徒募集の戦略

(1)　塾との連携／私学の棲み分け

安東　最後に、生徒募集について伺います。私学はどこもこれに頭を悩ませ、しのぎを削っているのですが、大妻中高では、生徒募集の広報はどういう形で行っていらっしゃいますか。特に首都圏の私学は募集範囲が広くて大変かと思いますが。

増田　学校の中に入試広報部がありまして、進学塾と提携するケースも多いです。入学者については、塾の△△校出身というリストが上ってきますので、入試広報部や教頭らが、それぞれの塾の教室に行き、「今年は受験生を入れてくれてありがとうございました」と挨拶をしています。その折、中1の担任と連絡を取り合って、「何組の○○

さんが、例えば日能研の△△校出身で、今度、△△校に挨拶に行くので、この生徒についてちょっと教えてくれませんか」と伝えます。そうすると担任からメモが上ってきて、塾での挨拶のときに、「今、○○さんはテニス部で頑張っていますよ」とか、「数学が得意なようで、この間のテストでもいい点数をとっていました」などと伝えています。そのようなつながりをつくるなど、塾にポイントを置いています。

学校主催のものでは、大妻講堂という大きな器を使い、学校説明会や入試説明会をかなりたくさん行っています。5月、6月では、塾主催のものがほとんどです。この他、東京の私立中高協会主催で、夏に国際フォーラムで合同説明会、秋には池袋のサンシャインで合同説明会があり、結構、外からお膳立てをしてもらえています。

安東　東京には東京私学協会という私学の団体があって、私学の強い結束がありますね。

増田　強いですね。東京の中で、第1支部から11支部まで分かれていて、それぞれに支部長を定めて、連絡がきれいに行き渡るようになっています。

安東　近年では、私立だけでなく、公立も競合校になってきています。例えば、日比谷や戸山など幾つかの公立校が〝特別指導重点校〟になったり、〝進学指導特別推進校〟や中等教育学校になったりするなど、進学校化していく動きもあります。そうした公立高校改革の動きに対して、私学として何か取り組みや対策のようなものはされていらっしゃるのですか。

増田　正直、私学の中でも棲み分けがあると思うのです。本校の場合、なかなか一番手校にはならず、二番手校くらいの扱いになっていきます。そうすると、そういう大きな公立学校とうちを併願する生徒がどれだけいるのかなというところですね。

これだけ高いレベルの公立学校ができてしまうと、この学校とうちとを併願することはなさそうだから、あまり大きな影響はないだろうということです。入試において、あそこの学校とは競合するんだけれども、こっちの学校とはあまり競合せず、影響することはなさそうだなどと読むわけです。「うちも進学校化するよ」と打って出てもいいところだとは思うのですが、なかなかそこに踏み切れない。というのは、これまでの顧客を失ってしまう厳しさがあるんじゃないかと思うからです。

安東　そうですね。東京では私学がたくさんあり、複数の学校受験が可能ですから、いわゆる棲み分けというものがかなり進んでいるんでしょうか。

増田　うちを第一志望として受けてくれるお嬢さんもいれば、もっとランクの高い学校を第一志望とし、うちを第二志望として併願で押さえてくれるお嬢さんもいます。入試のときには併願校調査をきちっとして、この率でこの点数だと、多分こっちの学校は受からないから、うちに来てくれるよねという具合に、1人ずつ読み合わせていって、入学者を数えています。

安東　生徒募集において、卒業生がどこの大学に何人入っているかは、すごく大きな要素

ですか。

増田　それはもちろん。公にも出していますし、必要なデータが求められれば出す方向で取り組んでいます。さらに、入試説明会に来てくださる方々には、今年の入学実績という形で、実際の大学名、合格人数を出しています。ときには延べ数ではなくて、実数を出して、これだけ進学しましたよと出すようにしています。ここのところ、推薦も含めて医学部が好調なので、よくやっているポイントになるのでしょうかね。

(2)　私学のサバイバル戦略

安東　関西は東京と比べると競争が緩く、まだまだぬるま湯のような印象があります。

増田　東京は競争が激しいと思います。上位は上位で競争があり、中位は中位で競争があります。多摩校をつくったとき（1988年）だったでしょうか、こんなことを言われました。「何年後かには、中学校の募集定員と中学受験人口と比べると、受験人口が明らかに下回るようになる。とにかく私学に行きたい子たちが、いろんな学校に割り振られたとき、必ず空きが出る。つまり定員を満たせない学校が出てくる。ここからは生き残り競争であって、大妻といえども安心はできない」。僕が入ってきたころから、当時の校長先生がおっしゃっていました。「多摩にも学校をつくろう、中高一貫にしよう。そして外の大学に出ても大丈夫なようにしよう」。それについては、図らずも大学が後押しをしてくれたのですが、それで何とかここまで来てますかね。

安東　多摩のほうも生徒募集は順調ですか。

増田　多摩は、地域的にちょっと厳しい感じになって、午後入試をしたりもしています。午後入試は危険な色合いがあって、実施すると生徒は集まるんですが、ちょっと入学者が読みにくいんです。最後の手段みたいなことだと言われてもいます。

今、それとは別に国際入試を行っており、帰国子女ではなくて海外経験があるとか、あるいはずっと海外で育って、それでも日本の教育を受けに戻ってくるとか、海外帰国生ではない別な条件での入試も始めたり、かなりグローバル性をアピールして、生徒を集めています。

入試の説明会や入試の募集についても、例えば受験生の答案をかなりまめに添削してあげるとか、そんなサービスもしています。結構、皆さん忙しく働いていらっしゃる。逆に部活は、とてもそこまでは見られないから週3日までとか、休日は試合以外はやらないようにしようというバランスをとっている感じです。

安東　そういったニーズと言いますか、その辺をちゃんと読んでいかないと生徒募集は厳しいですね。

中には、学校の教育方針、方向性が急に変わる学校の事例もありますね。私学の場合、教職員の入れ替わりが少なく、トップ主導による変化への反対も多くて、なかな

か変わりにくいということも指摘されます。方向を転換する学校の場合は、経営トップの理事長さんが変わり、陣頭指揮を執るという場合が多いのでしょうか。

増田　ありますね。推論ですが、どう生き残ればいいのかということなので、かなり塾の手が入っていると思います。結構、塾の主催の講演会に参加をしているとか、学校改革の一員にその塾から派遣した人を使ってくるとかです。塾も、この学校はうちの塾の手が入っているよということで、受験雑誌などでも持ち上げます。その辺では、結構、学校の浮き沈みが出てくるかと思うのです。

安東　その場合、ずっと学校にいる教員などはどうするのでしょうか。教員への理解や、教員の処遇といった点で不満が出てくるかと思うのですが。

増田　実は平成の真ん中あたり（平成十数年頃）に、うちの学校より下の偏差値だった学校がぐいぐい上がってきて、今、完全に抜かれてしまった例があります。鷗友さん（鷗友学園女子中学高等学校）もそうですし、洗足さん（洗足学園中学高等学校）もそうですね。この辺は校長先生が舵取りをして、旗振りをして、うちの学校はこういうふうに変わっていくよ、言い方は厳しいかもしませんが、実際にこの流れについてこない人は辞めていいからということで、教員を切っていく。そういうニュアンスで改革を果たしていったところはありますね。

安東　関西もそこまでやる学校もたまに出てくるのですが、ある学校は理事長が変わり、女子校から共学化し、進学校化に舵を切りましたが、そのとき、それまでの教員をバンバン切っていったようです。

増田　ある会社の社長さんが、学校を乗っ取るような形で校長、理事に入ってきました。教員にいわゆる社会研修として、自分の経営する会社で 2 カ月働いて来なさいみたいなことをやるなど、いい意味でも悪い意味でも結構、評判になりました。さすがに関東首都圏で、そこまで強引にやるところは、あまり多くはなさそうです。

特に偏差値帯 50 を下回るような学校は、本当は何かをやっていかないと先が見えてしまっているので、制服を変えたりしているというのは結構聞きます。他に、学校の中に幾つかのコースをつくって、学校の特徴化を図っていくとか、そんな形です。学校独自というよりは、やはり塾との連携が大きいかと思います。

それは塾でも、そういう学校の対象にした研修会を積極的に行っていて、そこにたくさん学校を呼んで、今のトレンドはこうですよとか、そちらでもやってみませんかという形の、そういう内容の研修を行っています。

安東　関西の学習塾でも、コンサルタントのような仕事を行っていると聞きました。

増田　この近くにある森上教育研究所などは、割合うちの学校とは深いつながりがあって、火曜クラブという森上さんのところの研修会には、教頭とか入試部の主任は出るようになっています。ただ、まだうちの風土として、塾に転がされることを多くの教

員は望んでいないので、塾が儲かるような世の中はおかしいんじゃないのと言いながら、自分たちの学校でやる教育、そちらに工夫を凝らしているということですかね。遅ればせながら、今、学校では新しいカリキュラムを検討中です。

安東　大変お忙しい中、データを用意していただき、貴重なお話をいただきまして誠にありがとうございました。

＜インタビューの編集について＞

上記のインタビューの掲載については、以下のような編集方針とした。

・テープ起こしを行ったのち、発言の意味を明確にするため、省略された言葉を補う、繰り返しや言い間違いを削除する、話し言葉を整える、年号を補う、などの作業を、インタビュワーである安東の責任で行った。また、一部のインタビュー内容については、紙面の都合上、割愛させていただいた。

・読者に伝わりやすくするため、語られた内容の順番を入れ替えた箇所がある。また、インタビュー当日の回答が難しかった点については、後日にメールにて連絡をいただき、インタビューの中に組み込んだ箇所もある。

・以上の作業については、話の内容を変えない範囲で行った。

・以上を終えたのち、増田教頭先生に原稿を送付し、発言内容のチェックを行ってもらい、分かりにくい箇所がある場合、誤って伝わると判断をされた場合には、補足をしていただくようお願いをした。

・増田先生より原稿を頂載した後、もう一度安東がチェック、見出しを付けた。

謝辞

大妻中学・高等学校の増田稔教頭先生には、突然、関西の見ず知らずの者からのインタビュー依頼に快く応じていただきました。12 月におこなったインタビューでは、非常に率直な意見、そして正確な情報を頂戴するとともに、貴重な資料まで用意していただき、誠にありがとうございました。さらに、入試業務でお忙しい中、原稿のチェックもしていただきました。増田教頭先生と学園関係者各位に厚くお礼を申し上げる次第です。

（付記　本研究は、平成 28 年度・教育研究所特別研究「私立中学・高等学校の動向とサバイバル戦略」の成果の一部である。）